

# 茨城大学学報

第339号

平成30年6月～平成30年7月



7月豪雨災害の募金活動の様子（水戸キャンパス）

## INDEX

- ◆ 第3回茨城大学国際量子線科学シンポジウムを開催
- ◆ アナハイム市親善大使が来訪 在学生や留学生と交流
- ◆ 平成30年度いばらき子ども大学合同開校式を茨城大学講堂で開催
- ◆ 創立70周年に向けて記念事業を展開
- ◆ 不二製油グループ本社とクロスアポイント契約
- ◆ 成績優秀学生を表彰 平成30年度より授業料を一部免除
- ◆ 国際フィールド農学センター開所式・記念シンポジウムを開催

茨城大学広報室

TEL 029-228-8008

FAX 029-228-8019

### ◆ 第3回茨城大学国際量子線科学シンポジウムを開催

5月30日～6月2日の4日間、水戸キャンパスで「第3回茨城大学国際量子線科学シンポジウム」を開催しました。

このシンポジウムは、量子線科学分野の国際的な研究・人材育成の拠点構築を目指して、本学が2016年から開催しているものです。第3回となる今回は、FRM-II 原子炉（ドイツ）、オークリッジ国立研究所（米国）、ローレンスバークレー研究所（米国）、ANSTO 研究所（オーストラリア）など、13か国の大学や研究機関から127名の研究者が参加し、本学大学院理工学研究科量子線科学専攻の学生を含む研究者・学生43名による招待講演のほか、40のポスター発表が行われました。同研究科の高妻孝光教授は、「世界の量子線研究拠点から研究者が集まった意義は大きい。また、今回は理工学系の学会としては珍しく、招待講演者の36%を女性が占めた。茨城には地域として女性の研究活動を支える素地があるので、今後、多くの女性研究者が茨城県北部を拠点として研究に取り組んでくれたら」と期待を述べました。

このシンポジウムには、科学技術振興機構の「JST さくらサイエンスプラン」により本学を訪問している若手研究者や大学院生も出席し、参加者と交流を深めました。



シンポジウムの様子

## ◆ アナハイム市親善大使が来訪 在学生や留学生と交流

6月26日（火）、水戸市と国際親善姉妹都市の盟約を締結しているアメリカカリフォルニア州アナハイム市より6名の高校生親善大使が来日し、茨城大学の学生や留学生等と交流しました。

親善大使一行は同大の水戸キャンパスを訪問し、授業の様子や図書館を見学したのち、同大の在学生や留学生等約30名とライブラリーカフェで懇談し、親交を深めました。



アナハイム市親善大使と茨城大学の学生ら

## ◆ 平成 30 年度いばらき子ども大学合同開校式を茨城大学講堂で開催

6月23日（土）、水戸キャンパス講堂で、平成30年度いばらき子ども大学の合同開校式が行われました。

「いばらき子ども大学」は、特定非営利活動法人（NPO）などで組織されるいばらき子ども大学実行委員会、茨城県教育委員会、茨城大学社会連携センターの共催事業として平成26年度に始まったもので、今年で5年目を迎えました。県内の小学4～6年生を対象に募集したところ1,078名の応募があり、678名の“大学生”が入学しました。

いばらき子ども大学では、大学の教員や専門家が豊富な専門知識を駆使しながら自身の研究テーマを小学生にも分かりやすく体系的に教えます。これによって子どもの知的好奇心を満足させるとともに、子どもが「学び」を通して総合的な知識を獲得し、創造力を育み、夢と希望を抱いて新しい未来社会を構築する力を蓄えることが目的です。

科学、金融、農業、医療、芸術など様々な分野について、県内の5つのエリア（県北、県央、県西、県南、鹿行）で小学生の興味にあわせた授業を企画し、茨城県内の大学等をキャンパスにして、来年1月まで授業が開講されます。

開校式では、いばらき子ども大学の学長を務める茨城県北生涯学習センターの野口不二子センター長、茨城県教育委員会の柴原宏一教育長、茨城大学の三村信男学長からそれぞれ挨拶があり、約700名の小さな大学生にエールが送られました。

第1回の合同授業は、国立天文台ハワイ観測所広報担当研究員などの経歴を持つ、国立研究開発法人情報通信研究機構鹿島宇宙技術センター主任研究員の布施哲治氏が講師を務め、『ようこそ宇宙の研究室へ～君の「なぜ？」を解決します～』と題して宇宙の壮大さを語りかけました。子ども大学生たちも真剣に講義を受講し、これからの学園生活を楽しみに目を輝かせていました。



主催者：左から茨城大・三村信男学長、茨城県・柴原宏一教育長、いばらき子ども大学・野口不二子学長



講義を聞く小学生たち

## ◆ 創立 70 周年に向けて記念事業を展開



茨城大学創立 70 周年  
記念事業ロゴマーク

本学では、2019 年に創立 70 周年を迎えることを記念し、学生の学修環境の充実を図るキャンパス整備や記念式典などの事業を展開します。7 月 4 日、「茨城大学創立 70 周年記念事業特設サイト」をオープンし、事業の周知を本格的に開始しました。

茨城大学は、1949（昭和 24）年 5 月 31 日に、当時の旧制水戸高等学校、茨城師範学校、茨城青年師範学校、多賀工業専門学校が統合され、同年制定の学校教育法に基づく新制大学として発足。また、1952（昭和 27）年には茨城県立農科大学が合流して農学部となり、現在の総合大学としての骨格が形成されました。創学以来、9 万 4000 人を超える卒業生を輩出しています。

70 周年の節目を迎えるにあたり、本学は、①学生の海外研修等の支援の強化、②水戸（食堂の増床）・日立（正門景観整備）・阿見（新研究棟の建設）の各キャンパスの整備、③同大の歴史を関係者のインタビュー映像や画像資料で振り返るデジタルコンテンツ「茨大ビジュアル年表」の制作、④学内外の多様な人たちが同大の将来について考え、語り合う「みんなの“イバダイ学”プロジェクト」などの記念事業を企画。さらに、これらの記念事業と各キャンパスの環境整備のための特定基金を設置し、事業への寄附を広く呼びかけます。三村信男学長は、「地域の知の拠点としての歴史とこれまで果たしてきた役割や実績を確認しながら同時に未来を切り拓くビジョンを考える機会としたい」と話しています。



記念事業を打ち出す三村信男学長（右）と佐川泰弘広報室長（左）

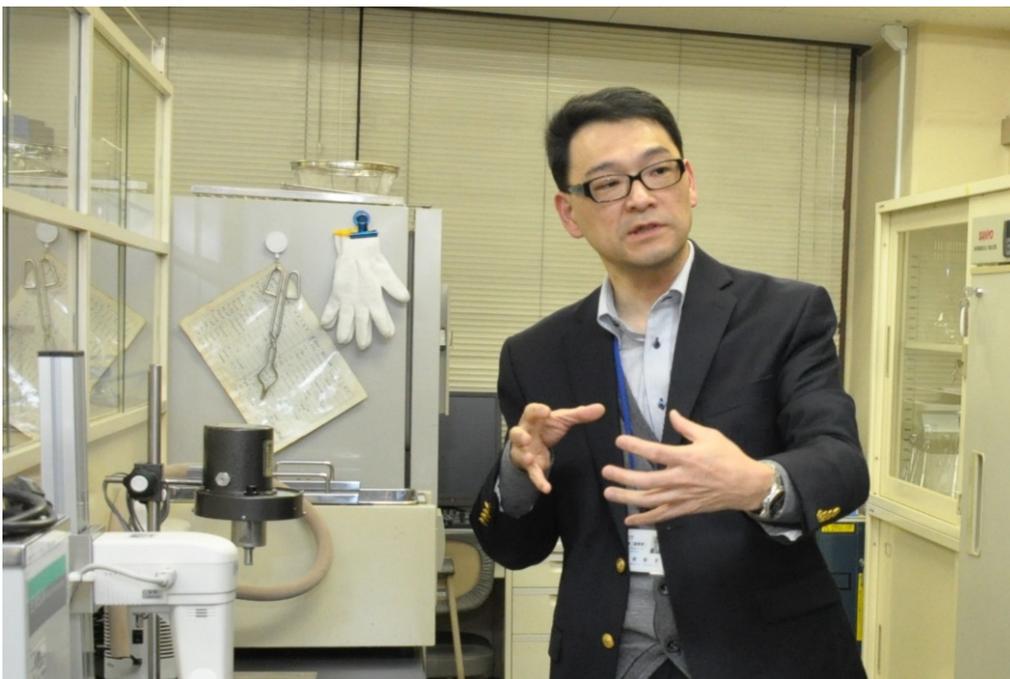
## ◆ 不二製油グループ本社とクロスアポイント契約

6月29日（金）、食品素材の開発・生産・販売をグローバル規模で手がけている不二製油グループ本社株式会社（本社・大阪府）と本学との間で、農学部の中村彰宏准教授の雇用に関するクロスアポイントメント制度の協定を締結しました。中村准教授は、不二製油グループ本社においては主席研究員として業務に従事します。所属教員をクロスアポイントメント制度によって他の企業へ派遣するのは本学にとって初めてです。また、不二製油グループ本社にとっても、初めて大学教員を同制度によって招き入れるということです。

本学では平成29年、農学部を大幅に改組し、食・農の生産や加工に関わってグローバル規模で活躍できる人材の育成を進めています。また、全学的にも今年1月に研究・産学官連携機構を発足するなど、大学と企業等との共同研究やイノベーションの創出を図っています。

また、不二製油グループ本社は、油脂、製菓・製パン素材、大豆の三事業を軸に、おいしさと健康を実現するための食品素材を開発、生産、販売する事業を、グローバル規模で展開しています。

今後、中村准教授は共同研究や製品開発の加速化に貢献し、ともにアジアを中心としたグローバル規模の活動を展開している点などを最大限活かし、両者における共同研究の強化や、学生・大学院生の実践的な学修の拡充につなげていきます。また、本学においては、時代に即した教員の柔軟かつ多様な働き方を実現するとともに、研究成果を産業界において実践することやその事業化など、産学連携による研究・教育の取り組みがより加速することが期待されています。



## ◆ 成績優秀学生を表彰 平成 30 年度より授業料を一部免除

7月25日（水）、水戸キャンパスにおいて平成30年度前学期成績優秀学生表彰式を行いました（日立キャンパス、阿見キャンパスはVCS接続により同時開催）。

これまでの学修成果が特に優れていると認められた学部4年次生39名及び大学院修士課程（博士前期課程）1年次生29名、計68名に表彰状を授与しました。表彰された学生には、平成30年度前学期分の授業料、学部学生は4分の1額、大学院学生は半額が免除されます。

表彰式で三村学長は、「学生には、将来やりたいことを見つけ、“自分にはそれをやり遂げる能力がある”という自信をもって社会に出てほしいと思っており、大学の学業成績はその能力を裏付けるものでなくてはならない。本学は卒業までに学生が身につけるべき5つの能力をディプロマ・ポリシーに定め、全てのカリキュラムがこれらの能力を身につけるために組まれている。表彰を励みとして、さらに力を伸ばしてほしい」と激励し、「優秀な成績をおさめた学生がこんなにもいることを誇りに思う」と結びました。これに対し、表彰を受けた学生は「勉学に励んだ結果として表彰を受けることができ、とても嬉しい。このような支援を受けられることに深く感謝している。さらなる学業の進展に活かしたい」と謝辞を述べました。

本学では、平成29年度までは学部学生を対象とした成績優秀学生奨学金制度を設けていましたが、これを平成30年度からは授業料免除制度に切り替え、新たに対象者を大学院修士課程（博士前期課程）学生まで広げ拡充を図りました。

本制度では前期と後期にそれぞれ表彰を行うものとし、前期では4年次生（2年後期から3年後期までの成績対象）と大学院修士課程（博士前期課程）1年次生（学部4年間の成績対象）が、後期では2年次生（1年前期～2年前期までの成績対象）が対象となります。学部から大学院進学まで途切れることなく支援することで、学生の学修意欲向上につながることを期待されています。



表彰を受けた学生（中央は三村学長）

## ◆ 国際フィールド農学センター開所式・記念シンポジウムを開催

7月26日（木）、農学部附属国際フィールド農学センターの発足を記念し、海外の研究者も招いて、開所式と記念シンポジウムを開催しました。

同センターは、従来の附属フィールドサイエンス教育研究センターを改組して今年（2018年）4月に発足しました。

農業や食をめぐるのは、国際競争の激化、<sup>ハサップ</sup> HACCPや<sup>ギャップ</sup> GAP等の国際認証の広がり、AI等を駆使したスマートアグリといった高度化・国際化への対応が、農業産出額全国2位の茨城県においても大きな課題となっています。そうした中、本学では、2017年4月に農学部を改組し、世界と地域で活躍する実務型農学系人材の育成を目標に掲げた教育活動をスタートしました。それにあわせて、本学農場についても、国際水準のGAPに対応した教育・研究を可能とする環境の整備を進め、今年の秋にはGAP認証を受ける見込みです。さらに本学においては、農学が専門分化しつつある中において、改めてフィールドを基盤とした総合的な視野からの教育・研究が重要であるという認識のもと「フィールド農学」という考え方を提唱しており、こうした背景から「国際フィールド農学センター」を発足するに至りました。

開所式に来賓として出席した茨城県農林水産部の大舘徹次長は、「茨城県内においても農業生産者の大規模化が進む一方で、国内の消費者が減る中、今後は当然海外市場への展開が想定されている。生産の現場の課題を解決する鍵は人材育成であり、茨城大学農学部の国際化に向けた改組は、時宜を得た取り組み。ますます協力を強めていきたい」と語りました。

さらに開所式の後に行われた記念シンポジウムには、阿見町の千葉繁町長らも駆けつけ、地域の農業関係者や卒業生など139人の出席がありました。記念講演を行った筑波大学の田島淳史教授は、日本の大学における農学教育と本学農学部の成り立ちの歴史を紹介。その上で同センターへの期待を示しました。また、いずれも本学で学んだ経験をもつ、ボゴール農科大学（インドネシア）のM.Faiz Syuaib（ファイズ・シュアイブ）教授、ガジャマダ大学（インドネシア）のAni Widiastuti（アニ・ウィディアストウティ）准教授、華南農業大学（中国）の牟英輝准教授が、本学との間の連携の経緯や最新の教育・研究の取り組みを紹介しました。

同センターの小松崎将一センター長は、「国際的認証を受けた生産についての教育を日本人にも留学生にも提供するとともに、地域企業との連携による農業イノベーションも推進し、『国際化』と『地域』の視点をあわせもつ新しい農場として成果を発信していきたい」と語りました。



開所式でブルーベリーの植樹式に  
臨んだ三村信男学長（右から2人目）  
と海外大学からのゲストの3人



管理棟前での記念撮影



シンポジウムには 139 人の  
来場者があった